This study aims to clarify how the villages in the plain field on the lower reaches of Yasu River, Shiga Prefecture, had formed. Especially, the arrangement of the farmhouse in Nojiri Village in the middle Meiji period and the composition of the block based on the Jyori-grid system are focused. As the result, its relations on the road access to site and the location of waterway are decided, and the residential area is composed of some blocks, and the model scale is 1/2 "cho", and the uniformity is composed of the sites where the farmhouse is regularly located.

**Keywords**: Oumi plain, Village, Area formation, Land allotment of Jyori-grid system, Arrangement of farmhouse, Meiji period

1. はじめに

本研究は、近江平野の中でも条里地割が卓越し、その遺構が今日までよく残っている滋賀県野洲川下流域、旧栗郡北東部地域を対象として、条里地割による平地集落の空間構造とその形成原理を明らかにするものであり、その第 1 段階として、前稿では、明治・大正期の地域空間の姿を復元し、地域空間の骨格を形成する家となっている条里地割と用水との関係を軸にして、集落と居住域の立地特性及び居住域形成の原理を考察した。第 2 段階として本稿では、一つの典型集落を対象として明治期の姿を再現し、家屋敷の特性と居住域のブロック割の特性を分析することによって、集落居住域の構成原理を考察し、条里地割を踏襲する平地集落の集住のしくみを考察する。これまでも集落の空間研究や空間計画の分野では、現状認識を深めるための認識仮説モデルや計画目標として示される計画モデルなど、集落空間のモデル化が数多く試みられている。しかし平地集落について、「散居」とされる相波平野の村落について、住居・屋敷・村落のシステム的な対応関係を分析し、個と集合のしくみとして、その構成原理を解明した研究が、条里地割や農業都市において接続条件と屋敷の空間構成（農家構造）の特性について考察し、屋敷配置を軸に置きながら集落の空間構造を解明している研究がある。しかし、集落の構成形成に関する研究が、限られており、また条里地割との関係で集落の空間形成のあり方や空間構造を解明しようとする研究は充分に行われていない。

なお、集落の居住域形成の時期について、歴史学や地理学等の分野では、港内各地において今日見られるような集約した村落景観の基礎が形成されるのは、在地制が変容し、村落の再編が行われる 13 世紀から 14 世紀頃と言われている。この地域の発展過程からも、15 世紀頃から、散住していた屋敷地が現在の集村の居住域に移行していった様子が報告されている。中世後期に、村落の自衛や灌漑用水、入会地の管理等を目的に、自村の集村共同体・塚村が形成され、村人自らが居住空間を形づくる基盤が整っていたことも大きな要素になっていると考えられる。しかしながら、この地域の集落が、どのようにして、このようなまとまりのある居住域を形成するに至ったのかについては、確かに史料が残されていないため明らかになっていない。そこで本稿では、村絵図・地籍図等の資料によって時代を通じて空間的特徴が把握できる明治期の集落の姿を復元し、空間の枠組みを形づくるしくみを検討することで、空間構成の原理を類推することとする。

2. 研究の目的と方法

本研究は、平地集落の構成原理を、典型集落の明治期の姿を再現し、家屋敷と道路・水路との関係及び居住域のブロック割の特性を分析することによって、家屋敷とブロックの二つの視点から基本単位を構造化するしくみとして明らかにしようとするものであり、その中で、条里地割が集落居住域の形成にどのように関係しているか
を考察する。


この典型集落の考察に先立って、本研究では、よりシンプルな集落形態をとっている茅葺の空間構成の分析を行い、条里地割に規定され、どのようにして居住域が形成されているのか、そのしくみを明らかにした上で、それを基に典型集落・野尻の居住域構成の原理を推測することとする[14]。典型的集落ではない茅葺を基に考察する理由は、野尻と同様、屋敷図によって明治期の家屋数の状況がわかるだけでなく、茅葺の形状が伊勢村の村制を踏襲するか否かが形成されたところ[15]であり、戸数も少なく、もともとは農地であったところが居住域になっていった様子が伺え、空間形成の基本的な姿をとらえやすく、居住域を構成する基本単位を考察するのに適しているからである。

調査方法は、野尻、茅葺とも屋敷図の町名図面をもとに戸別聞き取り調査により明治期の集落図を確認するとともに、現在住宅平面（増改築の状況を含む）、屋敷配置、前住宅平面等、居住空間の変化についてヒアリング及びプラン調査を行った。野尻については、さらに集落空間全体についてのヒアリングと実測を行った。調査時期は2000年10月〜12月である[16]。なお対象および関連する集落（野尻、茅葺、伊勢）及び他の典型的集落（大橋、北中路、霊仙寺、小平井、十里、阿）の位置は図1のとおりである（図には、6町四方の条里の基準線[17]を加筆している）。

3. 典型集落・野尻の集落空間および家屋数の特性

野尻集落は、粟東市の北端、守山市境に位置する。全城平垣な地で古代から農地として開発され、米米の中の農業が営まれてきた。近世の村高は、438石余りで、近世を通じて明治元年まで変化していなかった[18]ことから、明治初期と同時の農業生産力、つまり生産基盤や生産体制が近世初期には備えていたことが読み取れる[19][20]。明治期の状況は、明治11年の資料[21]で、戸数42戸、人口204人。土地は反53町5反20畝16歩、田地31町9反4畝11歩、畑地5反1畝25歩、地2町5畝26歩、種地反8畝23歩（草生ある hilarは寺地等）、離地反6反1畝21歩。水田21町。荷車8両。水車2ヶ所となっている。

次に、屋敷図の例図2に示す。屋敷図には屋敷番号と小字名・地番、地所持ち主、家庭持ち主、単線で描かれた「住家」[22][23]、「小家」、「土蔵」、「門」、「物入」等の様式ごとの名称と規模、屋敷構成、屋根の構造、方角が文書されている。その他、戸数に（宿舎）、備考として戸数と家族人数が、朱書きで加筆されている。このような屋敷図が作成された理由について、茅葺での調査より、「軍隊が野洲川周辺で演習を行っており、民家に家軍人をよく泊めて、子どもどうして何人家きもか自慢していた」と確認しており、明治大正期に大津に常所があった兵制第9連隊などの訓練時に宿舎場所を確保するために、各村に住民を割り当て、宿舎として集落の各屋敷配置と宿舎可能数を把握する必要があったと考えられる。

屋敷図には住家の入口に表記されていないが、四つ開取りの表側、普通、家族が就寝に使わずにザヤ、ダイの間に（宿舎）と朱書きされており、（宿舎）の文書が記載される住家形式が半入の表（入口）側であることがわかる[24][25]。屋敷図の屋敷番号は48番まで（26番が欠番）で、現地調査については、明治期と同じ地番のところに現在、建物があるが調査できなかったもの（未調査）6件、その場所に建物がなく調査できないものの（調査不能）6件を除く35件の調査を行った。

調査結果を基に、野尻の明治中期の集落図を作成する。活用した資料、方法は次の①〜④のとおりである。

①地形図（最も古い1/2,500地形図（S46年））を拡大した1/1,000地形図をベースに書める。②野尻村地図全図[26]と照合しながら各地番、敷地に屋敷図を配置する。③栗東郡粟東村地図全図[27]より土地利用区分を示す。④航空写真[28]と現地調査資料と照合・確認する。建物配置の方針は、屋敷図に記された方針を基に現地調査による修正を加え、さらに航空写真と照合し、建物の輪郭の把握を若かった者にやし、全体的に調整を行った[29][30]。以上
より作成した集落図を図3に示す。

図3には、道路や敷地へのアクセス方

位22）と、各場所の住家の入口位置30）

も記入している。集落図で示した家

屋敷の情報と道路、敷地、水路との関

係を整理すると表1のとおりである。

まず各場所の住家タイプについては、一

つ間 11、二つ間（縦）6、（横）3、四

つ間 26、六つ間 1 と、四つ間が最多

多い。一つ間、二つ間を合わせると4

割を超える。比較的小さな規模の住家も

多い。四つ間については、棟間3間の

もの5、3.5間 10、4間 10、4.5間 1

で、3.5間、4間が多く、桁行が6間の

ものが12と最も多く、面積で21～24

坪が標準的な大きさとなっている。

次に住家の棟の軸方向と敷地アクセ

ス方名、住家の入口位置の関係をみると

（表2）。なお、本文中や図表における

方位の表現は、絶対方位ではなく、里

地図および集落の軸線が真北より35°

東に傾いている、条里地図の軸線を

基準にした東・南・西・北を示意して

いる。棟の軸方向は、「東西」17「南

北」30である。これらの集落図における

立地状況は、中央の南北道路より東

側エリアでは18のうち、それぞれ13

で、西側エリアでは29のうち「東西」

8、「南北」21と、住戸密度の高い西側

では「南北」が7割以上と多くなって

いる。 「東西」については、東側では、

棟の軸と同方向・東から西にメインの

道路・水路が走るそれに接する両端


<table>
<thead>
<tr>
<th>表1 野尻の集落調査一覧</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>集落番号</td>
</tr>
<tr>
<td>01</td>
</tr>
<tr>
<td>02</td>
</tr>
<tr>
<td>03</td>
</tr>
<tr>
<td>04</td>
</tr>
<tr>
<td>05</td>
</tr>
<tr>
<td>06</td>
</tr>
<tr>
<td>07</td>
</tr>
<tr>
<td>08</td>
</tr>
<tr>
<td>09</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
</tr>
<tr>
<td>24</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
</tr>
<tr>
<td>26</td>
</tr>
<tr>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>28</td>
</tr>
<tr>
<td>29</td>
</tr>
<tr>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>31</td>
</tr>
<tr>
<td>32</td>
</tr>
<tr>
<td>33</td>
</tr>
<tr>
<td>34</td>
</tr>
<tr>
<td>35</td>
</tr>
<tr>
<td>36</td>
</tr>
<tr>
<td>37</td>
</tr>
<tr>
<td>38</td>
</tr>
<tr>
<td>39</td>
</tr>
<tr>
<td>40</td>
</tr>
<tr>
<td>41</td>
</tr>
<tr>
<td>42</td>
</tr>
<tr>
<td>43</td>
</tr>
<tr>
<td>44</td>
</tr>
<tr>
<td>45</td>
</tr>
<tr>
<td>46</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※注1 ①: 地形調査実施
②: 通路不明（地元の記録に未記載）
③: 未調査（調査区域がなかったもの）
※注2 不明 - 近隣なし
※注3 方向やアスペクトはあるものの Maeの方向
※注4 一つ間と二つ間の関係で、二つ間を増設を

を考察するのに役立つが興味あるもの
※注5 一部の地形が記載されていない
※注6 集落図の情報確認
※注7 地図・建物配置、雰囲気別定
※注8 便宜的な図等の水路は含まない。
の敷地で5、西側では居宅域の北端部で比較的多くみられる。

住家の入口配置は、棟の軸方向が「東西」では不名と東北1例を除いて、全て南入（15）であり、「南北」では不明を除いて全て東入（24）である。敷地のアクセスについては、「東西」の場合、西が7と最も多く、南、北、東が3〜4と同程度である。一方、「南北」の場合、敷地へのアクセスは西が2と少なく、他は7〜10と同程度である。

以上、住家の軸方向ごとに敷地アクセシン、入口位置の関係をまとめたのが図3である。「東西」では、住家が南入で敷地南面を広くとり、敷地へのアクセスは西が多く、他各方向からあり、「南北」では、住家は東入で敷地東面を広くとり、アクセスは西が少ない以外、東、南、北の方向からも多い。

次に住家と付属家の関係をみる。付属家では、住家の「四つ間」以上タイプにおいては小屋がほとんどみられるため、住家に対する小家の配置の仕方を含めて、屋敷構えの形態を把握する。表3より小屋は27例見られる。配置の仕方は、住家の軸方向と直角方向、L字になる「並行」型、住家の軸方向と向き合う、間を開けるスペースをとる「並列」型、住家の軸方向と同方向で、住屋に連なる（接続するものを含む）「直列」型に分類される。この中で、「並行」型は11例と最も多く、次いで「直列」型9、「並列」型6となっています。これを住家の軸方向との関係でみると特徴が明らかで、「並行」型は、住家の軸が「南北」方向で最も多く見られる。

「直列」型は、「南北」方向でも4例見られるが、「東西」方向が5例とやや多くなっている。「並列」型は、「東西」方向が4で、南北方向に敷地に余裕がない「南北」の場合と2と少なくなる。

次に、住家の軸方向と住家の入口、座敷配置、メイン水路の位置関係をみたのが図4である。住家の軸方向が「東西」のものは、入口が南で、座敷が東、土間が西のとなる住家が10例と最も多い。

このタイプは、水まわりが水の流れの下方向に配置しメイン水路も北が半数を占めている。一方、「南北」のものでは、入口が東で、座敷が北、土間が南となるタイプが15例と最も多く、メイン水路が南ないし西は合計10例と2/3を占めている。逆に、座敷が南で土間が北となるタイプが9例あり、それはメイン水路が北のものが5となっている。いずれも、水路に近い方向に土間を配する傾向が強いことから、水路の位置が、住家の座敷と座敷の配置を決める大きな要素になっていることが理解できる。

以上、「東西」と「南北」の住家配置に着目して、立地場所（敷地条件）や住家入口と道路アクセスの位置、小屋配置の仕方、住家の座敷や土間のとり方と水路の配置位置関係をみた。「東西」配置は東側エリアで同方向に走るメインの道路・水路に接する両端の敷地や西側エリア居宅域の北端境界部で多くみられ、住家入口は南入で、敷地南面を広くとって、小屋配置は「直列」型あるいは「並列」型とし、道路は西から多いが他方向からもアクセスでき、水路は敷地の北の多い。「南北」配置は、住戸密度が高い西側エリアに多く、住家入口は東入で、敷地東面を広くとって、小屋配置を「平行」型あるいは「直列」型とし、道路は南、西からに入るパターンが多く、水路は南側が最も多く、北側、西側もあり、水路位置に対してより柔軟に住家の配置ができるタイプとなっている。

4. 荷原の集落空間および家屋敷の特性と空間構成

荷原集落[23]は半村制と市川原村が合併して形成され、二つの居宅域からなる。屋敷図の推定面積は26haであり[23]、現在調査は全体にわたって行ったが、ここでは、伊勢市の観点として比較的簡易に集落が形成されたと推測される半村制をみていく[23]。現在調査は13番までのうち3件を行った。

図5は野原集落と同様の資料[23]、方法で作成した明治中期の集落図である。また、集落図で示した家屋敷の情報と道路、敷地、水路との関係を整理したのが表5である。各家屋の住家のタイプは、二つ間（縦）1、二つ間（横）1、二つ間2、四つ間8、七つ間1と6割以上が四つ間である。四つ間の規模は、梁間8間のもの2、3.5間2、4間3、5.5間1となっており、桁間は7間が最も多く、面積では、21〜28坪に多く分布している。住家の棟の軸方向については、「東西」7、「南北」6と、野川に比べ「東西」配置が多くなっている。これは、戸数が少なく、敷地条件の制約も比較的小さいためだと考えられる。集落内での「東西」の立地状況は、敷地アクセスの位置関係では、全て北からアクセスとなる字南側（中の井川より南側）で、4例のうち3例が「東西」方向である。また、北側の字四
反町では、居住域の北端部において、「東西」方向が多くなっており、野尻集落の傾向とも一致している。

表6 住家に対する小家配置

<table>
<thead>
<tr>
<th>住家の種類</th>
<th>住家に対する小家配置</th>
<th>住家数</th>
<th>小家数</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>東西</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>南北</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>6</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>4</td>
<td>6</td>
<td>10</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

表7 住家の軸方向と入口、座敷配置、水路位置

<table>
<thead>
<tr>
<th>住家の軸方向</th>
<th>住家の入口</th>
<th>座敷配置</th>
<th>水路の配置</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>東西</td>
<td>南部</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>北北</td>
<td>東部</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>南南</td>
<td>南部</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>6</td>
</tr>
</tbody>
</table>

図5 明治中期の荘原（半荘）の集落図 1/2, 500

図6 荘原（半荘）の空間構成と条里地割の関係を示す半荘の集落図をもとに検討する。図6は、半荘の集落図に条里地割のラインを描いたものである。条里の基本単位である1町×1町（1町歩）の「坪」区画を東西方向に2等分し、水路、道路、隣隣等で区画された30間×60間のエリア（図6、グレードで色分けした部分と色分けしていない部分を交互に並べている）を「基本ブロック」と呼ぶことにすると、中の川より北側の字西反町の居住域は、二つの基本ブロックで構成されていることがわかる。基本ブロックは、南北方向に5

等分した。30間×12間の長方形（半折型[23, 26]）の農地（水田）の耕作地を踏襲し、さらに長辺を2等分した15間×12間（180歩）の土地が、宅地化の基本単位となっている[23]。なお、図7は荘原（半荘）の居住域とその周辺の地割の状況をみたものであるが、周辺の圃場域には半折型の条里地割だけでなく、長地型の条里地割が多く見られるのに対して、居住域においては、基本ブロックを形成する半折型の条里地割が卓越していることがわかる。

表5 荘原（半荘）の集落調査一覧

<table>
<thead>
<tr>
<th>住家の種類</th>
<th>住家の軸方向</th>
<th>座敷配置</th>
<th>水路の配置</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>東西</td>
<td>東南部</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>北北</td>
<td>南西部</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>南南</td>
<td>東南部</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>6</td>
</tr>
</tbody>
</table>
図 5 に示すように、基本ブロックの両端 (長辺方向) にうまく水路が配されることを計画している。すなわち、居住区の辺の境界を形成する第一水路から中の井川まで 5 つの水路があり、第 2 水路、第 3 水路は基本ブロックの長辺とラインが一致する。第 4 水路については、ブロックを通過する地点を短辺内にある（第 3 水路との間隔が 30 間より狭い）が、終点は、ブロックのほぼ短辺端を通過する（1,27）。

図 8-1 は、条里地帯と基本ブロックの導入の仕方を示している。基本ブロックは基本地帯によって連結し、各ブロックには内部にアクセス道路が導入され、短辺が長辺方向にちょうど 2 等分されると、宅地の基本単位は、30 間×2×12 間＝180 間となる。

図 8-2 は、骨格道路（1,28）と家屋敷をつなぐアクセス道路の導入の仕方を示している。基本ブロックは骨格道路によって連結し、各ブロックには内部にアクセス道路が導入され、短辺が長辺方向にちょうど 2 等分されると、宅地の基本単位は、30 間×2×12 間＝180 間となる。

図 8-3 は、分野の軸方向に分割する分割道路（1,29）が導入されていることを示しており、2 本の南北の道路によって、居住区が大きく 3 分割されている（1,30）。これにより集落中心部をとり囲むように道路が配置されるとともに、規模の大きな敷地を確保することが可能となり、中心部にお寺が設置されている。また、居住区北端部では、分割道路が北側境界部の規模の大きな宅地へのアクセス道路として機能している。

続いて、このような主要要素を組み合わせる方法によって形成される敷地・ブロックと屋敷配置の関係を確認しながら、個々の家屋敷のつながりがどのように構造化され、全体を形成しているのかをみていきたい。既に家屋敷の特性分析において、道路アクセスを含めた敷地形状や水路の位置によって、住家方位の方向変更と方向の取り方、小家配置の変更等を含む屋敷配置が一定決まることを述べてきた。たとえば、図 8-1 の南から 2 つの基本ブロックに対応する家屋敷の配置を図 3 でみると、No.37～No.45 の 9 つの家屋敷がほぼ基本的な宅地割に対応して立地している。住家方向が「南北」が 7 と多数を占め、基本ブロック両端の水路に対して、アクセス道路より南では土間が南側に、北では北側に寄って配置されるものが多く、水路を利用しやすい屋敷配置となっている。そして、敷地単位では同様の配置パターンをもつ家屋敷が連続してつながっていく住居の構造になっている。また、居住区の西端部では 5 つの家屋敷のうち「南北」の住家方向のもののが 4 つを占め、それらはいずれも敷地西側に寄って住家が配置し、東および南からアクセスされ、西側に開かれた敷地配置となっている。このような規則性をもつ敷地が連続してつながることで、居住区全体として西に開き、東に開いた空間を形成することになっている。居住区の北端部についても同様、北
図9 野尻の居住域外周部における屋敷配置の連続性
配列される傾向が強く、住家の入口は東方、敷地外面を広くとって、道路は北、東、南から入るパターンが多い。敷地アクセシビリティを考慮し、敷地中央部より出入口を設け、入口間を取り入れることで、敷地全体として、統一性のある空間を形成している。

6. まとめ
本稿では典型的集落・野尻の明治期の姿を再現し、住民数の特性を分析するとともに条里地割を踏まえた基本ブロックの考え方を導入し、集落形成の構成原理を検討した。結果、以下の知見が得られた。

① 敷地数を構成する要因は、「住家」、「小家」、「土蔵」、「物入」、「ハナレ」、「川」等があり、住屋規模の大きい「四間」以上のタイプでは「小家」がほとんど見られる。

② 住家は、機能の方向が「東西」、北寄りの「南北」、南寄りの「南北」が割戸を占める。住家の入口は「東西」では南寄り、「南北」では東寄りが一般的で、もともと住家の敷地正面前を広くとする敷地配置の仕方は共通している。

③ 主家に対する小家の配置の仕方は、住家の機能方向と南寄りの「東西」、北寄りの「南北」、西寄りの「東西」、南寄りの「南北」に選べる（伝統的なものを含む）縦列形に分類される。

④ 集落宅地全体の中での地勢状況は、住家密度の高い西側エリアで「南北」の住家の割合が高く、東寄りの「東西」、東寄りの「南北」、西寄りの「東西」及び南寄りの「南北」に限定されている。

⑤ 住家の方向や間取りの取り方（玄関、座敷、土間の位置）小家側の住家配置を含む敷地配置は道路アクセスを含めた敷地形態と水路との関係によって決まってくる。特に水路の位置が住家の間取り配置を決める大きな要因となっており、現状配置は、水路位置に対して、より柔軟な対応ができるタイプとなっています。

⑥ 最もシンプルな形態をとるが、集落形成の初期段階の姿を反映していると思われる茅原（茅屋）の空間構成を検討した結果、集落形成が、条里地割をベースとした1/2町×1町の基本ブロックにより構成されていることが示された。その間には、さらに長辺を5等分した30間×12間＝360歩（1反）の長方形の株置地を有している。

⑦ 基本ブロックのモデル的な形は、両端長辺方向に水路を配し、ブロック内部側辺を分割するアクセス道路を導入することで、30間（30間/2）×12間＝180歩の基本的な宅地割が得られるものとなっている。

⑧ 野尻では、このような基本ブロックが居住域を形成する骨格となる道路によって連結し、いくつか組み合わせて全体の枠組みが形成されている。一方、基本ブロックの水路の下流方向と直行する軸方向（南北）に西側エリアの居住域（東西1町）を分分割する道路が導入され、中心部をとり固むよう道路が整備されている。これにより、バリエーションに富むブロック割や宅地割がなされ、基本の宅地割により広い敷地を有する公共空間やお寺を中心部に配し、中心性をつくるものとなっている。

なお、東側エリアも含めた居住域全体の空間はどう形づくられているかについては、今後の検討課題として残されている。

⑨ 敷地アクセシビリティと水路との関係により定まった敷地単位で同様の配置パターンを持つ住家屋敷が連続してつながる住宅区の構成となっていることにより、基本ブロックの様々な組み合わせ事ながらも敷地全体で集落として統一性のある空間が生まれることにつながっている。

謝辞
調査にあたり、野尻集落、茅原集落の区長はじめ住民のみなさんには多大なご協力をいただきました。また、栗東市歴史民俗博物館の学芸員の方々、調査実施と結果のとりまとめを共同で行った福井大学学豊研究室30期生の秋山文子さん、研究室の方々には大変お世話になりました。記して感謝の意を表します。

注
注1) 文献1
注2) 2009年調査及び水路により分割された複数の地番で構成される土地割り。
注3) 本稿では設置の側面に偏って、どのような制度によって敷地数が立地していくのか、その枠組みや方向性を検討する目的を明示することに力を置いている。集住のしくみの理解に、このような空間的な側面だけでなく、社会集団や共通性の単位など、多面的なアプローチが求められるが、それらについては今後の課題である。
注4) 文献2
注5) 文献3～5
注6) 文献6, 7
注7) 条里地割が卓越した地域において、工学的、計画的な立場から集落の空間形成の理解を行っているものとして文献8があるが、集落形成レベルまでを対象としていない。
注8) 文献9, 10など
注9) 文献11
注10) 文献12
注11) 文献13
注12) 大橋、野尻、茅原の研究を引用している。特に水路の位置が住家の間取り配置を決める大きな要因となっており、現状配置は、水路位置に対して、より柔軟な対応ができるタイプとなっている。}

－1067－